

スペイン風邪から100年 ⑦

江戸ッ子のわらんじを履くらんがしさ

3密・1疎&岩手県ゼロ・白い眼…… 3頁

3年前の2017年5月、自分の想いを文字に残そうと始めた「濁水かわら版」が100号になりました。濁水は、「莊子」の山木編にある「濁水清淵」^{きよい}。濁った水を見ていると綺麗な清淵を見失う^{まわれい}」による。ボケ防止を兼ね、今後不定期・無料・希望者に発信していきます。

① 図Aは、稲葉風・お駒風・谷風…と江戸町民が名称を付けた流行性感冒（インフルエンザ）の一覧です。第95号で紹介した富士川游著「日本疾病史」を基に作成した。計10件のうち日本発生の感冒は4件。海外で発生し日本に上陸したのが6件。今回の新型コロナ騒動のひな型は江戸時代にもみられるのだ。

② 見出しの「江戸ッ子のわらんじを履くらんがしさ」は、1771（明和8）年作の川柳。わらんじは草鞋。らんがしさは騒がしい。江戸学に詳しい西山松之助氏（1932-2012 年）は、「江戸ッ子」という言葉の初出であると、「江戸町人の研究」第2巻の「江戸ッ子」で断定している。2番目の江戸ッ子は、1773年の川柳「江戸ッ子の生まれそこない金を持ち」と記す。江戸学の大家と言われた三田村鳶魚（1870-1952 年）の初出は1793年。西山氏が調べた「江戸ッ子」文献一覧では、12番目に顔を出す。さらに同氏は、様々な江戸ッ子説を検証し、江戸幕府の「封建社会が崩壊過程に突入した時期に、江戸ッ子という江戸町人が現れて、顕在化したと言えよう」と述べている。西山説に説得力を感じた。私はパーティーで西山さんに時々お会いし、ゆっくり話を聞く機会を約束して下さったが、体調を崩し旅立たれたので話を聞けなかった。

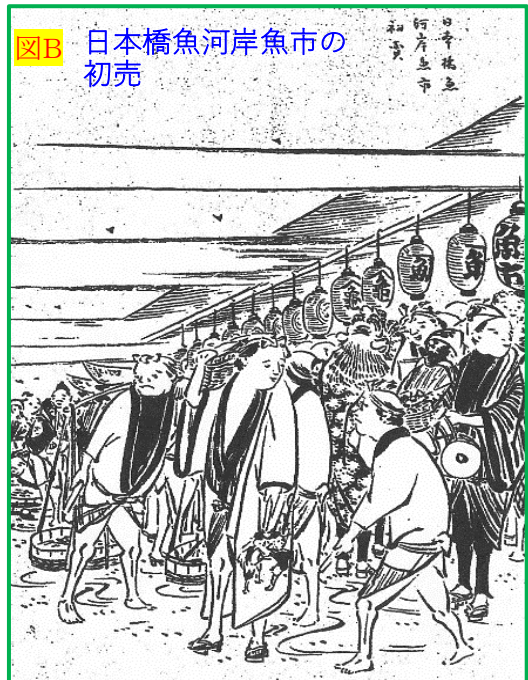
③ 以下は私の考えだが、明和8年は江戸時代に起きた庶民の大規模な伊勢神宮参詣の「御蔭参り」^{おかげまいり}の年でもあった。①1650（慶安3）年・②1705（宝永2）年・③1771年・④1830（天保1）年の計4回。妻は夫に、子は親に、奉公人は主人に断りなく飛び出し、毎回200～300万人が道中歌い踊り伊勢神宮へ向かった。「わらんじを履くらんがしさ」は、御蔭参りの光景のように思われる。

④ 図Aの表に「江戸ッ子」の文献初出年を挿入すると、稲葉風の2年後である。江戸時代後半の100年間の世相を反映した流行性感冒に命名したのは、江戸ッ子と密接な関係があるように感じた。西山氏は「江戸時代に江戸ッ子という人間集団を考察した文献は見当たらない。最初の江戸ッ子説は4代目歌川広重（本名菊池貴一郎：1849-1925年）の「江戸府内絵本風俗往来」（19

図A 江戸時代に名称で呼ばれた流行性感冒

西暦	和暦	感冒名	発生年・発生地→経由地
1769	明和 6	稲葉風	同年日本で発生
1771	明和 8	「江戸ッ子」の文献初出	
1776	安永 5	お駒風	1775 フランス発
1784	天明 4	谷風	同年日本で発生
1795	寛政 7	御猪狩風	同年日本
1802	享和 2	アンボン風 薩摩風 お七風	1802 仏→独→英国→日本
1808	文化 5	ネンコロ風	1807 英国発→日本へ
1821	文政 4	ダンホウ風	同年日本
1827	文政 10	津軽風	1827 北米→ロシア→シベリア
1832	天保 3	琉球風	同年 スペイン発
1854	安政元	アメリカ風	1852 年 世界各地で流行

図B 日本橋魚河岸魚市の初売



05＝明治38年刊）だろう」と記す。風俗往来の序文は「江戸は東京となり、30余年の間に新陳交代し…八百八街の中に生まれし老人の外は、江戸の旧事を知る者は稀なり。実は水道にて産湯をつかいし一人にて江戸純粹の歳時をありのままに書き散らす」と、意気込んだ書だ。

⑤ 図Bは、「絵本風俗往来」上巻に見える日本橋魚河岸の初荷の賑わい。日本橋は町民社会の中心地であった。 →次頁へ

貧民に御救い米 2波・3波の襲来

前頁から)と命名。太田南畝は「風神に送る狂詩」を残した。「引導此風谷風と号す 関関痰咳西東ニ響く 悪寒発熱人色無く…」と。

④1795年 御猪狩風:3月初旬、将軍が小金原に狩りをした4〜5日後に感冒始まる。その患者の着物の袖に必ず猪鹿などの毛が付着。故に御猪狩風と呼ばれた。理由は審らかでない、と。

⑤1802年 アンボン風・薩摩風・お七風:前年フランスで発生の感冒が02年正月にかけ長崎に上陸し3つの命名が残る。長崎では漂流船「アンボン」がもたらしたと。長崎から九州をへて京都に2/20〜3/20日に広がり、薩摩風と呼ばれた。一家で免れる者はなかったが、漢方薬の小柴胡湯などで治る軽い風邪だったようだ。江戸では2〜4月に流行、八百屋お七の小唄が流行ったことから「お七風」と呼ばれた。幕府から貧民にお救い米が配られた。

⑥1808年 ネンコロ風:前年冬から08年の春夏にかけ、小唄寝転々節が流行った。識者が、秋ごろ感冒が流行するだろうと予測。果たして8〜9月頃から感冒が発生。治るまで軽い者は2〜3日、重い者は30〜40日もかかった。英国発の風邪は関東から関西にまで及び「ネンコロ風」と呼ばれた。

⑦1821年 ダンハウ風:2月中旬から西は関西、東は千葉県、南は伊豆から北へ山梨や長野・新潟県に及んだ感冒。その頃「ダンホサンサン」と囁くことが流行り、「ダンハウ風」と呼ばれた。漢方薬で治る

今回のひな型がそろそろ江戸時代

者が多く、3月におさまった。一方で吐血する者もあった。幕府は仕事をする役人に長髪を許した。

⑧1827年 津軽風:北米からロシアをへて5月ころ日本に上陸。死亡する者もあった。津軽風の由来は同年4月、将軍家斉の太政大臣就任式に、津軽藩10代当主信順が禁止されていた轡輿(前方に長い棒が2本突き出した乗り物)で大勢の家臣を連れ江戸城に登城し、70日の外出禁止処分を受けたことによる。

⑨1832年 琉球風:天保の大飢饉の年。9月下旬から西国で流行し、霜月(11月)に奥羽に広がる。琉球使節が江戸到着の11/16日、初雪が降り、管弦での行列をし琉球風とよばれた。江戸では感冒免れる者なしも漢方により軽症で癒えた。御救い米が出る。

⑩1854年 アメリカ風:「正月から2月にかけて、風邪大いに江戸に流行す。その正月、米夷横浜沖へ至りし節故にアメリカ風と称す」(疫邪流行年譜の引用)。前年、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが浦賀に来航。54/1/16日、軍艦7隻を率い再び神奈川沖に。3/3日、幕府は日米和親条約を調印し下田・箱館の2港を開港し、鎖国から開国へ舵を切り明治維新を迎えた。同年秋に流行も漢方薬でおさまる。

⑪ 命名の多くに江戸っ子のウイットを感じると同時に、幕府が御救い米を出し、2波3波の流行もあり、今回流行のひな型が見られた。そうした教訓を生かさない今回の流行は、ゴーン被告の日本脱出を期した「ゴーン風」に始まり「アベノブレ風」「アベノマスク風」「3密風」「懸け麻雀風」「政権支持率急降下」等々。

3密・1疎&岩手県ゼロ・白い眼…

指針がコロコロ変わる政府厚労省

クルーズ船は3密 & 熱の目安は-

⑩ 横浜港に入港したクルーズ船に対し政府は、乗客・乗員3700人(うち乗客≒2600人)を狭い船内に閉じ込めた。かわら版95号で紹介した100年前の連合国のパンデミック会議での「心身の疲労で抵抗力が落ち、大きな部屋で換気を十分にすべし」が無視された。というよりも過去の貴重な教訓を把握していなかった事を暴露した。同船では≒20%が感染し13人が死亡。「3密はダメ」が登場したのは4/7日の緊急事態宣言発令や4/16日の緊急事態宣言の全国拡大でもなく、5/4日の緊急事態宣言延長での安倍首相の記者会見だ。「本日、日常生活において留意すべき基本的なポイントを専門家の皆様からお示し戴きました。密閉・密集・密接、3

厚労省、目安変更「37.5度以上」削除

つの密を生活のあらゆる場面で、できるだけ避けて頂きたい…。クルーズ船での隔離は、各国メディアから非人道的の批判を浴びた。各国に迎えに来てもらう外交努力をせず、約2週間後の2/20日前後に解放した。乗客は各国の迎えの航空機で帰国した。「3密ダメ」は、それから75日=2か月半後の話。まるで江戸時代の突然のお触れのように感じた。

⑪ その4日後の5/8日、PCR検査を巡り「37.5度以上4日継続」の発熱基準を削除した。PCR(Polymerase Chain Reaction)法は、ウイルスの遺伝子を増殖して検出する方法である。遺伝子の研究になくはない手法で、開発したキャリー・B・マリス(1944-2019年)は1993年、ノーベル化学賞を受賞した。今回のRCA検査を巡る報道では新型コロナウイルスのタイプがDNAかRNAか、判らないのである。DNAとRNAにも様々なタイプがある。→次頁へ

新型コロナはデング熱・C型肝炎・ノロウイルスの仲間!?

前頁から) 探し出したのは「日経メディカル」3/30日号の京大ウイルス研究所・朝長啓造教授へのインタビュー記事「そもそもウイルスってどんなものでしたっけ?」である。以下その概略の概略を引用する。

▼DNAウイルスのゲノム(染色体とDNA遺伝子本体がセットになったもの)は、宿主(寄生した人)のDNA複製酵素でウイルスのDNAを複製して量産する。

▼RNAウイルスのゲノムの本体はRNAだが、宿主がRNAの複製酵素でウイルスのRNAを作らない。そこでRNAは、RNA依存性酵素を使い宿主内でRNAを複製して量産する。この違いを素人発想で考えると、DNAウイルスは借りた店の備品を使い商品を作る。RNAウイルスは、借りた店の備品が使えないので、自分の欲しい備品を買い求め、借りた店で自分の好きな商品を作る。素人考えの間違えか?

ウイルスの種類は沢山あるようです。その中でコロナウイルスの仲間は、風疹ウイルス・日本脳炎ウイルス・デング熱ウイルス・C型肝炎ウイルス・ノロウイルス…。日常よく報道される嫌なウイルスのように思いませんか。しかもDNAウイルスよりRNAウイルスのPCR検査は検出時間を要し、結果が出るまで平均6時間余。だが海外では、スイスのロッシュの全自動検査機が主流という。≒1000万円と高価だが欧州では普及し、日本が1周遅れているらしいのだ。

28歳の力士のコロナ死

⑫ 厚労省が発熱基準を削除した5日後の 5/13日、大相撲高田川部屋の勝武士(28)が、コロナ肺炎で死亡した。日本相撲協会によると4/4日、38度台の発熱があり、保健所や病院に連絡したが、受け入れ先が見つからない日が続いた。4/8に血痰があり救急車で病院に入院したが、9日病状が急変し転院、PCR検査の結果、陽性と判明。集中治療室で治療を受け死亡。20代のコロナ死は初めてという。

⑬ 日本サッカー協会の田嶋幸三会長(63)は、感染を公表した。3月に欧州と米国に出張し同8日帰国した。妻の土肥美智子さんが朝日新聞のインタビューに応じた記事が5/12日掲載された。

土肥さんはスポーツドクターとして北京・ロンドン・リオのスタッフで同行、16年からサッカー男子日本代表にも同行している。3/14 日夜、微熱があると自室からリビングの土肥さんへ電話があった。同居の母(86歳)もあり、隔離することにし、食事の受け渡しに距離を置き、家の中でもすれ違わない。翌日も微熱があり3/16日、保健所に相談。指定された病院

で診察・検査を受け17日に陽性が判明した。以下、土井さんは、マンションの人々にメールで詳細を知らせ、買い物は夜にし、管理組合の判断で業者に頼み田嶋氏が触れた場所の消毒をした。大変な努力をしたことが参考になった記事だ。だが保健所の対応は、力士勝武士と大きな違いを感じた。安倍政権が人手の少ない保健所に誤った対応を丸投げしたことが原因で多くの人が命を失ったと考える。

岩手県感染ゼロの1疎

⑭ コロナ騒動が起きて4か月、非常事態解除まで感染者ゼロを続けた岩手県。▼盛岡の人からは、「コロナ甲子園で1位になりました。1疎だからです」のメールが届いた。今更岩手ゼロは「遅い」と思われようが、県人口は122.9万人。面積は15,278km²で北海道に次いで全国2位。四国の面積18,787km²の≒81%。林野面積が県面積の76%で宅地は285km²で2.2%。宅地1km²当たりの人口密度は0.43人。東京の2.48人に比べ≒1/6である。以上は私の計算だ。

▼地元紙岩手日報は「特命記者徹底解明」のタイトルで、盛岡大栄養科学部・木村京子准教授(臨床栄養学)の県民の好物を取り上げた。まずコロナ感染予防には①免疫細胞が働きやすい腸内環境づくり。②ウイルスを防御する粘膜や免疫細胞の強化。③ウイルスと闘う白血球の活性化の3要素が重要と力説す。

▼図Eは木村准教授が取り上げた盛岡市民が好む全国上位の食品。出典は、都道府県所在地と政令市の1世帯当たりの品目別年間支出額(2017~19年)全国順位だ。順位1位のヨーグ

図E 盛岡市民が好む食材		
食品・全国順位		年間購入額
ヨーグルト	1	16992 円
リンゴ	1	8856
ワカメ	1	2583
サンマ	1	1762
納豆	2	6189
ゴボウ	3	1326
サケ	8	5393

ルト、納豆は醗酵食品。いずれも腸内環境を整える。同じく1位のワカメは食物繊維が多く、3位のゴボウに豊富な水溶性のイヌリン酸(オリゴ糖)も腸内環境を整える。免疫細胞強化には、1位のサンマのたんぱく質、8位のサケに豊富なビタミンE、白血球の活性化にリンゴなど果物のビタミンCが効果的である。

▼9年前の東日本大震災の津波で自宅や会社を失った70代の男性が、池袋のタワーマンションの住民になった。その人が東京のナンバーの車で盛岡へ帰郷したら「白い目で見られた」という。

★小生は1型糖尿病対策で、上3品と温野菜500gをメインに“盛岡食”に似たメニューで想定外の八十路へ向け歩んでいます。なお「スペインから100年」は、次回は休み、検証を含め今後も続ける予定です。